

【書評】

Friedrich Nicolai  
Sämtliche Werke · Briefe · Dokumente  
Stuttgart (frommann-holzboog Verlag)

Kritische Ausgabe mit Kommentar. Herausgegeben von  
Rainer Falk, István Gombocz, Hans-Gert Roloff und Jutta  
Weber. – Berliner Ausgaben. 2011ff. Ca. 37 Bände. Leinen.  
Je Durchschnittsband bei Gesamtabnahme ca. € 251,-;  
einzeln ca. € 280,-. ISBN 978 3 7728 1829 5.

渡 部 重 美

2002年から2003年にかけて、勤務先の獨協大学から1年間の長期海外研修の機会をいただき、家族を連れてベルリンに滞在したときのことである。大学院時代に、慶應義塾大学の中田美喜教授の授業で『ゼバルドゥス・ノートアンカー』を読んで以来ニコライ（Friedrich Nicolai, 1733-1811）に興味を持ち、Peter Lang社からニコライの校訂版全集（通称、「ベルリン版」）が刊行されつつあることを知っていた筆者は、お世話になっていたベルリン自由大学のGert Mattenklott教授にこのことを話した。すると教授は、早速、この「ベルリン版」刊行に携わっているHans-Gert Roloff教授とErhard Weidl私講師を紹介してくださった。Roloff教授とは面識を得る機会を逸してしまっていたが、Weidl氏とは親しくお付き合いさせていただき、18世紀のドイツ文学史におけるニコライの重要性についてお話をうかがったり、あるいは、ポツダム広場のStaatsbibliothekで、ニコライの書簡の解読作業の様子を具体的に見せていただいたりした。日本に帰国して数年後、ベルリンからWeidl氏の訃報が届き、また、ほぼ時を同じくして、「ベルリン版」ニコライ全集刊行の企画がPeter

Lang 社から別の出版社に移譲されるとの知らせが入った……。

個人的な思い出はこのくらいにしておこう。この「ベルリン版」ニコライ全集刊行の企画が frommann-holzboog 社によって引き継がれたことは、筆者にとってはとても大きな喜びである。社のパンフレットによればこの全集は3部構成になっていて、具体的には下記の通りだが、これは Peter Lang 社で当初企画されていた構成とまったく同じである。ただし、Peter Lang 社の時代に編集者として名を連ねていた P. M. Mitchell 氏、Hans-Gert Roloff 氏、Erhard Weidl 氏のうち、現在も編集メンバーとして残っているのは Roloff 氏のみである。

Reihe I: Werke (ca. 14 Text- und 5 Kommentarbände)

Reihe II: Briefwechsel (ca. 12-15 Bände)

Reihe III: Dokumente (3 Bände)

Peter Lang 社からすでに第3巻、第4巻、第6巻（テキストおよび注釈）、第8,1-2巻が刊行済みで、今回新たに刊行されたのが下記2巻である。ちなみに、この2巻は当初、1993年に刊行される予定になっていたもので、20年以上経ってやっと日の目を見たことになる。また、瑣末なことだが、装丁についても Peter Lang 社の頃のもののがほぼ踏襲されている。

Band 1,1: Sebaldus Nothanker (Roman). Mit den Originalkupferstichen von Daniel Chodowiecki. Bearbeitet von Hans-Gert Roloff. 2015. 387 S., 21 Abb. Leinen. Bei Gesamtabnahme € 278,-; einzeln € 298,-. ISBN 978 3 7728 2511 8.

Band 1,2: Freuden des jungen Werthers – Eyn feyner kleiner Almanach (Erster und zweyter Jahrgang) mit einigen Liedern – Anhang zu Friedrich Schillers Musen-Almanach für das Jahr 1797. Bearbeitet von Hans-Gert Roloff. 2015. 310 S., 4 Abb. Leinen. Bei Gesamtabnahme € 278,-; einzeln € 298,-. ISBN 978 3 7728 2512 5.

第1,1巻に収録された小説『ゼバルドゥス・ノートアンカー』は、その正式名称『修士ゼバルドゥス・ノートアンカー氏の生涯と意見』（„Das Leben und die Meinungen des Herrn Magister Sebaldus Nothanker“, 1773-1776）から容

易に想像がつく通り、イギリスの作家スターン (Laurence Sterne, 1713-1768) による『紳士トリストラム・シャンディの生涯と意見』 („The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman“, 1760-1767) を念頭に置きつつ、テュンメル (Moritz August von Thümmel, 1738-1817) の『ヴィルヘルミーネ、あるいは結婚をした牧師先生』 („Wilhelmine, oder der vermählte Pedant“, 1764) の続編として構想されたものである。田舎牧師ゼバルドゥスと宮仕えをしていたことのある妻ヴィルヘルミーネの結婚後の消息を伝える内容だが、ヴィルヘルミーネは早々に死んでしまい、後は、牧師の職を追われたゼバルドゥスがさまざまな苦境に追い込まれて行く筋と、彼の娘マリアーネを中心とした筋が随所で交差しながら話が展開して行く。

ところで、主人公ゼバルドゥスが窮地に追い込まれて行く主な原因となるのが、彼の「理性使用」の問題である。例えば、自分の教区を追い出されてベルリンへ向かう途中で出会ったある敬虔主義者とのエピソードで、その敬虔主義者が説く神の恩寵、永劫の罰に関する考え方に対して合理的思考を展開するゼバルドゥスは、ある意味で「啓蒙された」男である。しかし、そもそも彼が教区監督シュタウツィウスとうまく行かずに教区を追い出されたのは、特にこの永劫の罰の考え方に納得が行かず、自分の教区民たちに対する説教を正統派の教義からはずれた形で行ったためであった。牧師である彼は、「自身が仕える教会の信条に則って、キリスト教教理を学ぶ生徒たちや教区民に講演することを義務づけられている」<sup>1)</sup> はずであり、カント的意味での「理性の私的使用」に徹するべきであった。一方で、彼が「学者として」、つまり「理性の公的使用」の場面で取り組んでいたテーマは、趣味道楽としか言いようのないものである。小さい頃からフランスはドイツの天敵であるという教育を受けてきた彼は、宮廷に仕えている間にフランス趣味を身につけた妻ヴィルヘルミーネから、フランス風の礼儀がまったく備わっていないと一度ならず非難されたため

1) I. Kant: Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung? In: Was ist Aufklärung? Thesen und Definitionen. Hrsg. von Ehrhard Bahr. Stuttgart (Philipp Reclam jun.) 1974 (Universal-Bibliothek Nr. 9714), S. 9-17. Hier S. 12.

に、黙示録の中にフランス人に不利な予言がないかどうかを熱心に研究し、注釈書を作っていたのだ。主人公ゼバルドゥスの目を通して依然として迷信が渦巻く時代の様子が描き出される一方で、ほぼ10年後にカントが論じることになる「理性使用」の区別がそう簡単なものでないことが先取りする形で論証されているとも読めるわけである。この他にも、大学を出たインテリたちの就職難、二重三重の下請け構造によって劣悪な翻訳を世にまき散らす翻訳工房の様子、書籍出版業界の重商主義的傾向によって質の悪い職業的文筆家が大量に生れる様子など、小説『ゼバルドゥス・ノートアンカー』には当時の社会の実情が生き生きと描き出されていて興味深い。

この小説については、Olms社によるリプリント版全集<sup>2)</sup>に収録されているものを始めとして、1991年にReclam社からBernd Witte編集の校訂版が出ている<sup>3)</sup>。Reclam版にはChodowieckiの銅版画も収録され、また、原文で44ページに渡るかなり詳細な注もついている。今回 frommann-holzboog社から刊行されたものにもChodowieckiの銅版画は収録されているが、注釈についてはこれから刊行の予定で、この注釈によってどの程度Reclam版との差異化を図れるのかが注目される。

また、第1,2巻所収の『若きヴェルターの喜び』 („Freuden des jungen Werthers. Leiden und Freuden Werthers des Mannes“, 1775) は、ゲーテ (Jo-

2) Friedrich Nicolai: Gesammelte Werke. Hrsg. von Bernhard Fabian und Marie-Luise Spieckermann. Hildesheim · Zürich · New York (Georg Olms Verlag) 1985ff.

3) Friedrich Nicolai: Das Leben und die Meinungen des Herrn Magister Sebaldu Nothanker. Kritische Ausgabe. Hrsg. von Bernd Witte. Stuttgart (Philipp Reclam jun.) 1991. 『ゼバルドゥス・ノートアンカー』については、Reclam版に先行してさらに、Friedrich Nicolai: Leben und Meinungen des Herrn Magisters Sebaldu Nothanker. Mit 16 Kupferstichen von Daniel Chodowiecki. Mit Nachworten von Harry Timmermann und Norbert Miller. Ungekürzte Ausgabe. Frankfurt am Main und Berlin (Ullstein) 1986. が刊行されている。Daniel Chodowiecki (1726-1801) の銅版画が16枚収録され、原文で18ページの注がついている。ちなみに、Chodowieckiは画家、銅版画家、そして当時の最も有名な挿絵画家であり、ニコライの他にもレッシング、ピュルガー、クロップシュトック、ゲーテ、シラー等の作品の挿絵、口絵、ピネットを手掛け、ベルリン芸術アカデミーの院長も務めた。

hann Wolfgang Goethe, 1749–1832) の出世作『若きヴェルターの悩み』 („Die Leiden des jungen Werthers“, 1774) の、いわば「毒消し」を目的としたパロディーである。

話の構成としては、最初と最後にマルティンとハンスの対話を持ち、その間に、マルティンがハンスに語る物語として「若きヴェルターの喜び」、「大人になったヴェルターの悩み」、「大人になったヴェルターの喜び」が挿入される形になっている。ハンスは21才の青年で、マルティンはその2倍の42才。マルティンに関しては、このパロディーが世に出たときちょうど42才だったニコライ自身である、と言われている。『若きヴェルターの悩み』を読んで感化され、ヴェルター的な生き方に憧れるハンスに、マルティンが上述した3つの部分から成る話をして聞かせることによって、結局ハンスはピストル自殺などしないと誓うことになる。

マルティンの語る話の内容を簡単にまとめると、自殺未遂（アルベルトの機転によって、ピストルには弾丸ではなく鶏の血がつめられていた）を犯したヴェルターが、人生の先輩であるアルベルトに導かれ、念願のロツテと結婚し、子供をもうけ、その子供の死を体験しながら人生の悲喜こもごもを体験し、青年から大人へと成長して行くという内容である。文学的価値からすると、ゲーテのオリジナルにはるかに及ばないパロディーではあるが、ニコライが描き出そうと努めたものは、人と人との節度をわきまえながらもお互いの心を理解し合い、苦楽を分かち合えるような関係、すなわち、この時期の文学作品で盛んにうたわれた人間性の中核を成すものとしての友情や愛情であり、そうした関係のネットワークとしての共同体——家族から始まって、地域社会に至るまでの——であり、これをひと言でまとめれば、啓蒙主義が掲げていたユートピア的市民社会の理想像であった、とすることができるだろう。

このパロディーに気を悪くしたゲーテは、『ファウスト』第一部「ヴァルブルギスの夜」の場面に、どこへでもでしゃばって口を出し批評したがる „Proktophantasmist“ としてニコライを登場させたり、あるいは『詩と真実』の中で非常に狭量で自惚れの強い男として批判したり、『クセーニエン』でシ

ラーとともにニコライ共同戦線を張ったりすることになる。その結果、いわゆる「ゲーテ時代」を中心に編まれる文学史の中では、例えば『《若きヴェルターの喜び》(1775) というパロディーを書く不見識を犯し<sup>4)</sup>、「古典主義、ロマン派の人々、そしてカントに反対する論争によって失笑を買った<sup>5)</sup> 男として、ニコライに対する否定的な評価が定着することになった。

『若きヴェルターの喜び』も、Olms 社の全集に収録されている他に、例えば Kiepenheuer 社から Wolfgang Albrecht 編集によるものが出ている<sup>6)</sup> が、注は原文で 2 ページ弱と少ない。この第 1,2 巻についても、今後どの程度充実した注釈がつけられるかが注目される。

ところで、上に引用したマルティーニは一方で、ニコライの「優れた批評活動<sup>7)</sup>」にもひと言だが言及している。ニコライの批評活動の中で特筆すべきは、何とんでも ADB („Allgemeine Deutsche Bibliothek“) の刊行であろう。ADB とは、1765 年から 1806 までニコライ書店<sup>8)</sup> から発行された書評誌で、付録と索引を含めて 1 巻あたり平均 640 ページのものが、全部で 256 巻にもなる<sup>9)</sup>。Günther Ost の非常に大雑把な見積もりによると、約 80,000 冊の、あらゆる専門領域の新刊書が書評された。北はコペンハーゲンから南はバーゼル、

4) フリッツ・マルティーニ (高木実、尾崎盛景、棗田光行、山田広明訳) 『ドイツ文学史 原初から現代まで』三修社、1979 年、215 ページ。

5) 同上、179 ページ。

6) Friedrich Nicolai: Freuden des jungen Werthers. Leiden und Freuden Werthers des Mannes. Voran und zuletzt ein Gespräch. In: Wolfgang Albrecht (Hrsg.): Friedrich Nicolai. >Kritik ist überall, zumal in Deutschland nötig<. Satiren und Schriften zur Literatur. Leipzig und Weimar (Gustav Kiepenheuer Verlag) 1987. また、これに先行して、Christoph Friedrich Nicolai: Freuden des jungen Werthers und Leiden und Freuden Werthers des Mannes. Voran und zuletzt ein Gespräch. In: Günter de Bruyn (Hrsg.): Christoph Friedrich Nicolai: Vertraute Briefe. Berlin (Buchverlag Der Morgen) 1982. が刊行されている。編者 de Bruyn による原文で 31 ページのあとがきはあるものの、注は一切ついていない。

7) フリッツ・マルティーニ 『ドイツ文学史 原初から現代まで』、179 ページ。

8) ニコライの父親が 1713 年に創業した、いわゆる Verlagsbuchhandlung で、ニコライがこれを継いでいた。

9) 厳密に言うと、この書評誌は 1793 年から NADB = „Neue Allgemeine Deutsche Bibliothek“ という名称になった。

西はマインツから東はケーニヒスベルクに住む、総勢 433 人の批評家がこの書評誌に原稿を寄せていた<sup>10)</sup>。ベルリンに滞在していたとき Weidl 氏にうかがったところでは、すべての巻の目次を整理するだけでも 3 年かかったそうである。

ニコライがこのような批評活動を展開した当時、ドイツはまだ政治的にも経済的にも独立した大小さまざまな国に分裂していて、作家たちが国境を越えて出会い、意見交換や情報交換をする機会はそれほどなかった。その結果、ドイツ文学は依然として地方色が濃く、国民文学のようなものはまだ望めなかった。ニコライが多方面にわたる活動を通して目指したのは結局、政治的・経済的境界線を超えた全ドイツ的な文芸フォーラムを形成することで、そうした仮想空間における自由で忌憚のない意見交換、つまり批評によってのみドイツ文学は鍛えられ、改善され、発展して行くのだと確信していたわけである。次世代のゲートを中心としたドイツ文学隆盛の、言ってみれば下地を作ったのが、ADB を中心としたニコライのこの批評活動だったと言っても過言ではない。

さて、Peter Lang 社によるニコライ全集出版計画が告知されたのは、1981 年である。それから 10 年経ってようやく、Mitchell 氏編集になる第 3 巻<sup>11)</sup>を皮切りに数巻が刊行されたものの、いったん計画は頓挫。告知から 30 年以上経って、出版社を frommann-holzboog 社にかえて今回の第 1,1-2 巻刊行に至った。完結するまでにさらにどれほどの年月がかかるのか見当もつかない壮大な計画だが、気長に待つことにしたい。筆者がとりわけ楽しみにしているのが、Reihe II: Briefwechsel である。上述したように、ベルリン滞在中に筆者

10) Vgl. Erhard Weidl: Vorüberlegungen zur editorischen Erschließung der Nicolaischen Korrespondenz. Ein Werkstattbericht. In: Jahrbuch für Internationale Germanistik. Hrsg. von Hans-Gert Roloff, u.a. Jahrgang XXI-Heft 1. Bern · Frankfurt am Main · New York · Paris (Peter Lang) 1989, S. 154-178. Hier S. 156-157 und Günther Ost: Friedrich Nicolais Allgemeine Deutsche Bibliothek. Berlin (Verlag von Emil Ebering: Germanische Studien. Heft 63) 1928, S. 36.

11) Friedrich Nicolai: Sämtliche Werke · Briefe · Dokumente. Kritische Ausgabe mit Kommentar. Hrsg. von P. M. Mitchell, Hans-Gert Roloff, Erhard Weidl. Bd. 3: Literaturkritische Schriften I. Bearbeitet von P. M. Mitchell. Berlin · Bern · Frankfurt am Main · New York · Paris · Wien (Peter Lang) 1991.

は、ポツダム広場近くの Staatsbibliothek で Weidl 氏からニコライの書簡を実際に見せていただき、どうやってその筆跡を活字化して行くのか説明していただいた<sup>12)</sup>。ニコライが当時の作家、批評家等々と交わした書簡は、前述の ADB とともに、いわゆる啓蒙期のドイツにおける文学・文芸の状況をより正確に記述するためのこの上なく貴重な 1 次資料となるはずである。

---

12) Weidl 氏が 1989 年に発表した報告によれば、この Staatsbibliothek には、ニコライ宛ての書簡が 18,572 通、ニコライからの書簡が 381 通保管されている。仮にこれを合わせて 20,000 通と概算し、1 通あたりの印刷ページを 1 ページと考えても、注釈や索引などを含めないで 1 巻 500 ページの書簡集が全部で 40 巻になる。この中ですでに編集・出版済みの書簡は、4~5 パーセント程度とのことである (Vgl. Erhard Weidl: a. a. O., S. 161-162.)。もちろん、この Weidl 氏の見積もりからすでに四半世紀以上経っているので、この間に解説作業は大きく前進しているはずである。ちなみに、今回の全集とは別にすでに編集・出版されている書簡集もいくつかある。主だったものを列挙すると、以下の通りである。

- ・ Richard Maria Werner (Hrsg.): Aus dem Josephinischen Wien. Geblers und Nicolais Briefwechsel während der Jahre 1771-1786. Berlin (Verlag von Wilhelm Hertz) 1888.
- ・ Heinz Ischreyt (Hrsg.): Johann Jacob Ferber: Briefe an Friedrich Nicolai aus Mitau und St. Petersburg. Eingeleitet von Albrecht Timm. Herford und Berlin (Nicolaische Verlagsbuchhandlung) 1974.
- ・ Bernhard Fabian und Marie-Luise Spieckermann (Hrsg.): Friedrich Nicolai. Verlegerbriefe. Berlin (Nicolaische Verlagsbuchhandlung) 1988.
- ・ Heinz Ischreyt (Hrsg.): Die beiden Nicolai. Briefwechsel zwischen Ludwig Heinrich Nicolay in St. Petersburg und Friedrich Nicolai in Berlin (1776-1811). Ergänzt um weitere Briefe von und an Karl Wilhelm Ramler, Johann Georg Schlosser, Friedrich Leopold Graf zu Stolberg, Johann Heinrich Voß und Johann Baptist von Alxinger. Lüneburg (Verlag Nordostdeutsches Kulturwerk) 1989.
- ・ Bernd Maurach u.a. (Hrsg.): Der Briefwechsel zwischen Friedrich Nicolai und Carl August Böttiger. Bern · Berlin · Frankfurt/M. · NewYork · Paris · Wien (Peter Lang) 1996.
- ・ Holger Jacob-Friesen: Profile der Aufklärung. Friedrich Nicolai - Isaak Iselin. Briefwechsel (1767-1782). Edition, Analyse, Kommentar. Bern · Stuttgart · Wien (Verlag Paul Haupt) 1997.
- ・ Mechthild und Paul Raabe (Hrsg.): Adolph Freiherr Knigge – Friedrich Nicolai. Briefwechsel 1779-1795. Mit einer Auswahl und dem Verzeichnis der Rezensionen Knigges in der »Allgemeinen deutschen Bibliothek«. Göttingen (Wallstein Verlag) 2004.